

## 【書評・紹介】

菊池 俊彦 編 『北東アジアの歴史と文化』  
 (札幌, 北海道大学出版会, 2010年12月, A5判, 606頁, 7200円+税)

中村和之

本書は、日本における北東アジアの考古学と歴史学の研究史上に大きな業績を残した、北海道大学の菊池俊彦名誉教授を編者とする論集である。本書のあとがきに記されているように、本書は当初、菊池氏の退職を記念する論集として企画されたものである。その後さまざまな経緯を経て、現在の日本における北東アジア史研究の水準を示すという形で出版されることになったのである。

本書は、論文28篇とコラム2篇の計30篇の論考からなる。以下に各論考の題名を示す。

表紙画像

はじめに 菊池俊彦

#### 第Ⅰ部 北東アジアの考古学世界

- 松村博文・石田肇「北東アジアの人類集団」
- 加藤博文「出シベリアの人類史」
- 長沼正樹「アムール下流域のオシポフカ文化」
- 大貫静夫「北東アジア新石器社会の多様性」
- 村上恭通「北東アジアの初期鉄器文化」
- 林 俊雄「草原の考古学」
- 高濱 秀「[コラム] モンゴル高原のヘレクスルと鹿石の発掘」

#### 第Ⅱ部 北東アジアの古代国家

- 蓑島栄紀「蝦夷と肅慎」
- 東 潮「辰韓・濊・秦韓・新羅・統一新羅」
- 木山克彦「『靺鞨罐』の成立について」
- 酒寄雅志「東亜考古学会の東京城調査」
- 小嶋芳孝「クラスキノ城跡井戸出土土器群の考察」
- 臼杵 勲「女真の考古学」

#### 第Ⅲ部 環オホーツク海の古代世界

- 石田 肇「オホーツク文化を担った人々」
- 福田正宏「オホーツク文化成立以前の先史文化」
- 天野哲也「オホーツク文化前期・中期の地域開発と挫折」
- 熊木俊朗「元地式土器に見る文化の接触・融合」
- 澤井 玄「国後島の大規模竪穴群と擦文文化」

#### 第Ⅳ部 北東アジアの中世世界

- 小口雅史「北日本の古代末から中世」
- 武田和哉「契丹国(遼朝)の成立と中華文化圏の拡大」

白石典之「イエケ＝モンゴル＝ウルスの成立過程」

村岡 倫「モンゴル高原から中央アジアへの道—13 世紀のチンカイ城を通るルートをめぐる—」

中村和之『『北からの蒙古襲来』をめぐる諸問題』

越田賢一郎「ガラス玉の道」

#### 第V部 北東アジアの民族接触

杉山清彦「明代女真氏族から清代満洲旗人へ」

菊池勇夫「近世日本から見た千島列島史」

川上 淳「漂流民が見た千島のアイヌ」

佐々木史郎「サンタン交易の経済学」

津曲敏郎「セイウチの来た道」

松浦 茂「[コラム]『秘帳坎々奇話』と『北征秘談』」

あとがき 臼杵勲・加藤博文・中村和之

索引(人名索引, 事項索引, 地名・遺跡名索引)

以上のように、本書には考古学・歴史学・文化人類学・言語学などさまざまな分野の研究者が論考を寄せている。そのすべてを紹介することは、とうてい筆者のなし得ることではない。また仄聞するところでは、しかるべき学会誌に専評が載せられる予定とのことである。そこで本稿では、本学会と学問領域的に近いと筆者が判断した論考を数篇選び、その内容を紹介するに留めたいと思う。

まず、川上淳「漂流民が見た千島のアイヌ」は、千島史や対外関係史の研究に漂流記が有効な史料であることを論証する。川上氏は、寛文元年(1661)段階のエトロフ島では、小刀や耳輪等の金属製品はあるが、米を知っていなかったこと、ラッコ猟を行っていたことを指摘する。正徳2年(1712)では、煙草や煙管などより日本製品が流入しており、宝暦6年(1756)年では米を知っている上に木綿が入ってきており、松前藩からの文書が到達し内容も理解されていたことを明らかにしている。また漂流民が着ていた木綿製と思われる着物を、当然のようにはぎ取っている事実は、金属製品と同様に着物が貴重品であったことを示すものとする。いずれも千島アイヌの文化を明らかにする上で、貴重な指摘である。

つぎに、佐々木史郎「サンタン交易の経済学」では、1853年に白主で行われた交易でリーダー格3人のサンタン人の利益を分析し、彼らが大きな利益を得ていたことを明らかにする。彼らが利益をあげることができた理由は、サンタン側と日本側で毛皮の評価額が異なるためであった。佐々木氏は、サンタン交易は「未開民族」の物々交換の連鎖による物流ではなく、貨幣に裏打ちされた価格単位の存在を前提とした等価交換による高度な経済活動だったと指摘している。また佐々木氏は、アムール河下流域のニヴフやウリチではヤ、より上流に居住するナナイではヤンという貨幣単位が用いられていたこと、ヤ・ヤンは中国語の両や満洲語のヤン(両)に由来する語であるが、サンタン交易が廃れた後、これらの単位は急速に忘れられたことを明らかにしている。さらにナナイやウリチの中に中国銀を持っている人がいることから、中国の銀あるいは銀貨がこの地域で実際に流通した可能性を指摘している。

最後に、津曲敏郎「セイウチの来た道」は、菊池俊彦氏が論じた環オホーツク海のセイウチの牙交易について、言語の面から追跡している。菊池氏は、北海道のオホーツク文化の遺跡から出土するセイウチの牙製品に注目し、セイウチの牙はカムチャツカ半島南部から千島列島

を經由して、またはオホーツク海北岸地域から北西岸を經由して交易によってもたらされたであろうと指摘する。津曲氏は、日本語のセイウチの語源を確認し、サハリン島の言語としてアイヌ語・ニヴフ語・ウイльта語、さらにツングース諸語、チュクチ・カムチャツカ語族におけるセイウチとその関連語彙を検討する。その検討の上に津曲氏は、チュクチ・カムチャツカ語族のセイウチを表わす語が、牙を表わす語としてツングース諸語に伝わったとし、さらにウイльта語から樺太アイヌ語とニヴフ語に伝わった可能性を指摘する。また言葉の面からは、ニヴフがセイウチを入手するに際して、エヴェンやエヴェンキなどのツングース諸族の介在によったことが考えられるとしている。

以上 3 篇の紹介によっても、本書の内容の多様さを知っていただけるものと思う。また、人名索引、事項索引、地名・遺跡名索引からなる行き届いた索引が付けられていることも、本書の価値を高めている。とくに、ロシア語の人名・地名の読みが統一されていることは有難い点である。

(なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校)